

## 被造物の「質料性」をめぐるアウグスティヌスの理解

菊 地 伸 二

### はじめに

アウグスティヌスにおける「創造」の問題を考察する場合、「無からの創造」(creatio ex nihilo)の教説は極めて重要な意味を持っており、彼の創造論の中心的位置を占めている。

それはひとりアウグスティヌスのみならず、古代教会の担い手であった教父たちにとってもそうであった。聖書においては潜在的には含まれていたとはいえ<sup>(1)</sup>、必ずしも表には出てこなかったこの教えが、どのようにして顕在化するにいたったのか、また単にそれにどどまらず、古代キリスト教においてどのようにして中心的位置を占めるようになったのか。このことを古代教会の教父たちの歩みに即して跡づけることはそれ自体、極めて興味深い問題である<sup>(2)</sup>。

しかし、恐らくヘレニズム思想、異教、異端等についての十分な理解を必要とするこの問題をここで扱うことは不可能である。

この論文では、アウグスティヌスの「創造」の問題の中心に「無からの創造」の教えがあることを絶えず念頭に置きつつ、被造物の在り方について、特にそれが「質料的部分を有している」こと、つまりその「質料性」に焦点をあてながら検討してみることにしたい。そこで、論文のタイトルを「被造物の「質料性」をめぐるアウグスティヌスの理解」として、以下次の順で論を進めていくことにしよう。

#### I 「無からの創造」について

#### II 「無からの創造」と「無形質料」との関係

#### III 『知恵の書』11章18節「あなたは世界を無形質料から造った」の解釈をめぐる

##### (1) マニ教反駁の文脈において

##### (2) 『創世記』冒頭の句との関係において

##### (3) 「世界」の意味について

#### IV 「質料性」の意味するところ

## V 靈的被造物の「質料性」

おわりに

### I 「無からの創造」について

神がこの世界を無から造ったといういわゆる「無からの創造」の教えは、何よりも創造主との関係で被造物の在り方を明らかにする上で重要である。その創造主と被造物との関係については、『マニ教徒を反駁する創世記注解』では次のように言われている。「神が造ったのであり、それら（被造物）は造られたものである。また神は被造物がご自身と同じになるようにご自身から生ぜしめたのではない。むしろそれによって造られたそのお方に等しくないものとして無から造られたのである。またそれを通して造ったその御子にも等しくないものとして造られたのである。<sup>(3)</sup>」ここに創造主と被造物の存在的な決定的な相違が描かれており、それは後者が「無から造られた」ということに帰着する。創造主のこの絶対的な優越性、あるいは両者の間の埋めることのできない深い溝こそはこの教えに含まれる一番の要であるといえる。そしてこのように主張するアウグスティヌスの背景には彼自身のマニ教時代の苦い体験が横たわっている。マニ教は、いわば善悪二元論的な世界観を説き、その中で、神に由来しない闇の国とも言うべき悪の存在、質料的な世界を容認するとともに、反対に、人間のある部分（特に靈的な部分）は神に由来すると主張する。

この二つの事柄は彼にとってはともに不服であった。後者の人間のある部分が神に由来する、つまり、本質的に神と等しいとする主張については、創造主と被造物の間の埋めることのできない深い溝という考えの対極に置かれるので容易に理解することができる。では、前者の神に由来しない質料の存在についてアウグスティヌスが異議を唱えるのはどうしてか。それは簡潔に言うと、神が造らなかった存在、いやむしろ、神が造りえなかった存在があることを認めることであり、それは神の創造という営みを、さながら何かある材料を使って製作する陶芸師や銀細工の職人のように考えることになり、つまるところ、あらかじめ存在していたものを材料として用いることなくすべての本性を造った、神の全能性を否定することになるからである<sup>(4)</sup>。

ここにおいて、神の全能性ということが、すべての被造物を造ったという意味で使われていることが明らかにされるとともに、神が被造物を絶対的に優越しているということがすべての被造物を造ったということであることが確認され、先に引用された「神が造ったのであり、それら（被造物）は造られた」という言葉の重みが改めて実感されるのである。この神の全能性と「無からの創造」との関係について、『信仰と信条』では次のように言

われている。

「もし彼らが全能の神がこの世の製作者であることを認めるならば、彼らは必然的に、神は、その造ったものを、無から造ったということを告白しているのである。なぜなら、もし、神が全能であるならば、神がその創造主でないようなものが存在するということとはありえないからである。<sup>(5)</sup>」ところで上述の「無からの創造」の理解から、神の全能性、その絶対的優越性は示されたが、神によって造られた被造物の持つある種の自由性について彼はどのように考えていたのであろうか。神の絶対性が被造物の無能性と即座に直結しないために、彼はどのようなことを考えたのであろうか。このことを考察する上で、被造物が「質料的部分を有している」という事実、つまりその「質料性」に目を向けることは有益であると思われる。以下、被造物のそのような在り方についての説明を目指しながら、その「質料性」に焦点をあてて論を進めることにしよう。

## Ⅱ 「無からの創造」と「無形質料」との関係

そこでまず被造物の「質料性」を考えると、アウグスティヌスにおいてすぐ問題になってくる「無形質料」について触れておこう。アウグスティヌスは「無形質料」という考えをネオプラトニズムから学んだといわれるが、今日、旧約聖書統編に収められている『知恵の書』11章18節の「あなたは世界を無形質料から造った」という箇所は、「無形質料」の聖書的根拠になっている<sup>(6)</sup>。この作品はまた、それ自体極めてギリシャ的色彩が強いと言われており、この箇所も古代教会においてもたびたび問題とされてきた。特に、ある教父たちにとってそれは、質料の永遠性を主張するプラトンの考えを否定することなしに受容するための聖書的な拠り所となっていたのである。今、ここではその詳細に触れる余裕はないが、しかし、少なくとも、古代教会において問題とされてきたこの箇所は、一体アウグスティヌスにおいてどのように理解されていたのであろうか。彼は、神がこの世界を「無から創造した」ということと、神がこの世界を「無形質料から造った」ということとをどのように関係づけて理解しているのであろうか。アウグスティヌスは、この両者の関係が決して単純でないことを十分に承知していたと思われる。というのも、『信仰と信条』ではこの二つのことについて論じたところの最後で、「私たちが以上のことを言ったのは、「神がすべてのものを無から創造した」と書いてあり、また「世界が無形質料から造られた」と書いてあるからという理由で、人々が聖書の言葉は矛盾していると考えないためである」と述べているからである。それでは、アウグスティヌスはこの両者を矛盾することなく、どのように解釈したのであろうか。まず、「無からの創造」という教えの

要である「神がすべてのものを創造した」ということについては彼は一步も譲らない。しかし同時に、彼は創造主と被造物との間の埋めることのできない溝を否定することもしない。つまり、創造主と被造物とはともに存在しているとはいえ、その存在の仕方は決定的に異なるのである。すなわち、創造主である神は永遠で不変的であるのに対して、造られたものである被造物は移ろいゆく可變的なものである。そしてその根拠は、被造物が神によって造られたものの、神から造られたのではなく、無から造られたということ、より具体的にいうと、その存在を構成する要素として質料を含んでいるということに求められるのであり、そのことを聖書的に裏付けているのが「無形質料から造られた」という箇所になるのである。この世界、またこの世界に存在するすべてのものは、今日あるような形のものとして存在するために、まず神は「無形質料」といわれる何かあるものを造り、次にそれをいわば素材として今日あるような形あるものを造ったという。『信仰と信条』には、「たとえ世界が何らかの質料から造られたとしても、その質料そのものが無から造られたのであって、神のきわめて整然とした定めによって、まず諸々の形を受ける能力が生じ、次いでおよそ形づくられたものとしてあるすべてのものは形づくられることになったのである<sup>(7)</sup>」と述べられており、創造主である神はすべてのものに形を与えただけでなく、形を受け取る可能性、能力をも与えたということが記されている。アウグスティヌスにおいては、「無から創造された」ということと、「無形質料から造られた」ということが矛盾することなく、むしろ、前者が後者をいわば内容的に包み込むような仕方で一応解決されることになるのである。従って、被造物はその在り方として自らのうちにこの形を受け取る能力、可能性を持っていることになるのである。

そこで次に、アウグスティヌスが「無形質料」をどのようなコンテキストで捉えていたかをみるために、『知恵の書』11章18節「あなたは世界を無形質料から造った」を引用しているテキストに注目することにしよう。

### Ⅲ 『知恵の書』11章18節「あなたは世界を無形質料から造った」の解釈をめぐって

ボナルディエールによれば、『知恵の書』のこの箇所は、アウグスティヌスの全著作において全部で9回引用されている<sup>(8)</sup>。その数は決して多いとは言えないが、年代的にみるとかなり広域にわたっており、絶えず彼はこの箇所に関心を抱いていたのではないかとと思われる。著作活動をしていたのが32歳から76歳までとして、年齢で示すと次のとおりである。すなわち35歳の時『マニ教徒に反駁する創世記注解』において1回、39歳の時

『信仰と信条』において1回、40歳の時『未完の創世記注解』において1回、45か46歳の時『告白録』において2回、50歳前半の時『創世記注解』において2回、そして65歳の時『律法と預言者の反対者への駁論』において1回となっている。それでは「あなたは世界を無形質料から造った」という箇所をアウグスティヌスはどのように理解していたのであろうか。そこでここでは三つの点に注目してみることにしよう。

#### (1) マニ教反駁の文脈において

まず、この聖書の箇所の引用に関して注目されることは、それがかつて彼自身が属していたマニ教を反駁する文脈で使われているということである。実際、9回のうち7回は、そのような文脈で用いられている。質料的なものを如何なる意味でも神に由来させようとしない二元論的なマニ教に対して、「すべてのものが無形質料から造られた」ことを主張するこの箇所は確かに反駁に値する。ところで、アウグスティヌスはマニ教に属していた頃を回想して、「その頃、私は無形質料を誤って理解していた、その意味で考えていなかった」と語っている<sup>(9)</sup>。すなわち「無形質料」という言葉の下に、さまざまな形がごちゃごちゃになったようなもの、厳密な意味で形を欠いているのではなく、とても見られるようなまともな美しい形をしていないという意味で形になっていない（無形の）そのような集合体を考えていたのであった。アウグスティヌスはまた、『告白録』において「実際あらゆる形相を欠いているものは存在しないと考えるほうが、形相と無との中間に、形相づけられてもいず、無でもなく、ほとんど無に近い無形の何かがあるなどと思うよりも容易であった<sup>(10)</sup>」とも語っている。

このことは間接的に、マニ教が正確な意味では、「無形質料」を捉えることができないことを語っていることになるのではなかろうか<sup>(11)</sup>。形相づけられたものと全くの無のいわば中間に、無形の何かがあると考えためには、ある形相から他の形相への移り変わりが何か無形のものによって起こるということを想定できなければならず、そのためには彼にとってネオプラトニズムとの出会いが必要であったと思われるが、逆に言えば、この「出会い」を「出会い」として成立させるためには、我々の被造的世界が変化して移ろいでいく有様を、いわば一つの原理として捉えようとするアウグスティヌスがそこにいなければならなかったということである。

#### (2) 『創世記』冒頭の句との関係において

ところで『知恵の書』11章18節の9回の引用のうち実に8回までが『創世記』1章1節または1章2節との関連で言及されていることは無視すべきではないと思われる。では『創世記』1章1節または1章2節とは何が語られているのか。引用してみよう。

- 1 はじめに神は天地を造られた
- 2 地は見え、形が作られていなかった

闇が深淵の面にあり、神の霊が水の上を覆っていた

それではアウグスティヌスは『創世記』の冒頭の部分と『知恵の書』のこの箇所をどのように関連づけているのか。初期の著作<sup>(12)</sup>に限って言えば、1 節の「天地」と 2 節の最初にある「見えず形が作られていない」といわれる「地」を結びつけ、さらに「深淵」「水」とも関連づけてすべて「無形質料」を意味していると捉える。この解釈の詳細については、アウグスティヌスの中で変化はあるものの、『創世記』1 章 1 節、2 節で言われている天地、つまり世界が今日私たちが見ている世界とは異なっており、まだ秩序づけられていないということ、確かに、何らかの意味で存在していたが、今日的な意味で存在はしておらず、形を有していなかったこと、その限りで無形的なものと言われる点では共通している。そしてそのような場面で「世界を無形質料から造った」という言葉が用いられるのである。ただこの際、注目しておくべきことは、この世界が「無形質料から造られた」ということによって、この世界が転変して移ろいゆくということのマイナス面だけが強調されているというよりは、むしろまだ形成されていないが形成されうるものとしてあることから、この世界が形相を受ける可能性を有しているものとしてある<sup>(13)</sup>というプラス面にむしろ力点があるということである。

### (3) 「世界」の意味について

ところで、『知恵の書』の「あなたは世界を無形質料から造った」と言われているところの「世界」については一体どのように理解されているであろうか。少なくともそれが引用された箇所に関してはどうであろうか。

『マニ教を反駁する創世記注解』においては、天地の名によって神が造った被造物全体があり、その天地については「混ざって形なくつくられた」と語られ、その後この聖句が引用されており<sup>(14)</sup>、もう一つの箇所でも被造物全体が「無形質料」から造られたことが語られていることから、ここで言われている「世界」とは被造物全体を意味していることができる<sup>(15)</sup>。

『信仰と信条』においては「彼は目に見えない質料から世界を造った」と引用されたすぐ後に、神が天と地、すなわち世界とその中にあるすべてのものをある質料から造ったとある<sup>(16)</sup>ことから、ここで言う「世界」は、「天と地」すなわち「世界とその中にあるすべてのもの」を意味していることができる。

『未完の創世記注解』においては、『創世記』1 章 1 節の「天地」を受けて、「天地と呼ばれたものは、まだ何らかの混沌状態にあり、そこから二つの大きな部分、すなわち天

と地とから成る世界が、諸要素に配分された形を受け取ることによって造られたのである」と言われており、その後に『知恵の書』のこの箇所が引用されている<sup>(17)</sup>ことから、ここでも「世界」とは全被造物を意味しているということができる。

『告白録』においては、『創世記』1章1節の「天」と「地」とは基本的に各々靈的被造物、物的被造物を意味し、『知恵の書』は2回引用される<sup>(18)</sup>が、いずれの場合も「地」を説明するものとして用いられている。このことから「世界」とはここでは物的被造物を意味しているということができる。

『創世記注解』においては、2回引用されているが、前者では自然の諸事物について述べられた後で、自然の如何なる質料も神なくしてはありえないということが確認され、そのことについて『知恵の書』が引用されている<sup>(19)</sup>ことから、ここでいう「世界」とは物的被造物を意味しているということができる。他方、後者では「万物は言によって成った。成ったもので言によらずに成ったものは何一つなかった。」また「言は世にあった。

世は言によって成った」と『ヨハネによる福音書』の言葉が引用された直後に、この同じ神の業を示すものとして『知恵の書』が引用されている<sup>(20)</sup>ことから、「世界」とはすべての被造物を意味しているということができる。

最後に『律法と預言者への反対者駁論』においては、特にマニ教という異端を攻撃する意図で書かれており、聖句の引用<sup>(21)</sup>の直前に「地」が全く無ではなかったということが言われていることから「世界」とは物的被造物を意味しているということができる。

以上、「あなたは世界を無形質料から造った」の箇所の解釈をめぐり、「マニ教反駁の文脈」「『創世記』冒頭の句との関係」「「世界」の意味について」という三つの観点から考察した。それぞれが用いられているコンテキストもさまざまであるので、これらの意味の違いだけをもって、それを年代的な違いと見做し、そこに思想的展開をみることには慎重でなくてはならないが、しかし少なくともこれらのことから次のことは言えるだろう。

- (a) 第一に、マニ教を反駁したり、またマニ教を念頭におきながらこの聖句を引用するときには、原則的に「世界」という名の下に、物的被造物が念頭におかれている。というのもマニ教はこうした世界が神によって造られたのではないと主張するからである。
- (b) 第二に、『マニ教を反駁する創世記注解』『信仰と信条』『未完の創世記注解』といった初期の著作においては、「天地」という名の下に物的な世界が念頭におかれている。『未完の創世記注解』において確かに非物的な世界も含む可能性も提起されるがそれは推論に留まっている。
- (c) 第三に、『告白録』においては「天」とは靈的被造物、「地」とは物的被造物と明確に区別され、無形質料から造られた「世界」の念頭におかれているのは物的な

世界である。しかし見落としてはならないことは、引用された 12 巻において「天」の下に意味されている非物体的被造物、つまり靈的被造物も無から造られた故の可変性をもっており、「すべての可變的なものは何か無形のものの存在を我々に知らしめる」とあり、それらも何らかの無形性を有していると言われていることである。

- (d) 第四に『創世記注解』においては、「天」と「地」、すなわち靈的被造物を含めたすべての被造物が「世界」という名の下に理解されており、さらにはそれらがともに「神の言葉」によって造られたということに重点がおかれている。

#### IV 「質料性」の意味するところ

これまでの考察から、アウグスティヌスは「創世記注解」という営みの中で絶えず『創世記』冒頭の句の箇所の中に「無形質料」を読み込み、「無形質料」を「形（相）」を受け能力、力、または可能性」として捉えていることが確認された。ところでこのような理解は、アウグスティヌスにおいてはその初期から見られるものである。例えば、比較的初期の著作である『真の宗教』においては次のように言われている。

「ある種の無形質料から世界が造られたとしても、この質料自身は、無から造られたのである。実際、未だ造られていないものも、ある仕方で、形成されようよう開始されたのである。神の恵みによって形成可能なのである。形成されることは善いことである。それ故、形成受容能力も善を少し持っている。それ故、すべての善きものの創造主は、形相を与えたのであるが、この方自身が、形成される可能性をも造ったのである。<sup>(22)</sup>」

ここでは善とのかかわりで、「無形質料」が形成されうる能力を持っている意味で何らかの善いものであると言われる。こうした性格規定は、『告白録』の第 12 巻で展開される諸々の解釈のある意味でまとめ部分的な部分とも言うべき 19 章（28 節）においても次のように言われている。

「創造され形成されてしまったものばかりでなく、およそ創造され形成されうるものはすべて、あなたがお造りになった。万物はあなたによって存在する。無形のものから形成されるものはことごとく、はじめは無形で、しかるのち形成される。<sup>(23)</sup>」もちろん、ここで念頭におかれているのは「無形質料」のことである。このことから、アウグスティヌスにおいては「無形質料が形を受ける能力を有している」という考えが絶えず基本に流れていたとすることができるだろう。ところで、『未完の創世記注解』では、『創世記』冒頭の句の「天地」「見えず形が作られていない地」「深淵」「水」がすべて「無形質料」を意味していることが確認された後、さらに次のような説明がされる。すなわち、「天地」がそ



ういわれるのは、それが将来造られるところのものを先取りしているからであり、「見えない造られていない地」「深淵の上の闇」がそういわれるのは「無形性」そのものを示しているからであり、「水」がそういわれるのは造られるために、働きかけてくる者にたいして従属性、造られやすさを示しているからである<sup>(24)</sup>。

これらのものを「無形質料」と呼ぶ解釈は、後になるとも必ずしもそのまま保たれるわけではないが、「質料性」の意味するところにも通ずる、「無形質料」の名のもとに捉えられている「無形性」「形を受けることへの可能性、能力」「形を受けることへの従属性」といった性質は基本的にその後も受け継がれているといっていよい。さらにまた、「水」を例にあげて、それが物体の中に帰っていく、諸々のものの中に回帰していく性質を *conversio* として表現しているのはその言葉が有している重要な意味を示すものとして注目に値する<sup>(25)</sup>。さて、それでは『創世記』冒頭の句である「天地」はこの質料との関係で何を意味しているのであろうか。これについてはアウグスティヌスの中で変化が見られることはすでに前章でみた。

例えば、『未完の創世記注解』では『創世記』1章1節の「天地」とは将来の姿を先取りしているものとして解されたが、そこで言われる「天地」とはとりあえず物的被造物が念頭に置かれているとみてよい。ところが『告白録』になると、アウグスティヌスは「天」と「地」とを別々に考え、さまざまな解釈をあげる。そして、他の解釈の可能性も残しつつ、「天」とは霊的被造物、「地」とは物的被造物がそこから生ずるところの無形質料と解する。さらにそれより少し後で書かれた『創世記注解』では、「天」と「地」とを別々に扱うことから、再び「天地」を一緒に考えようとする傾向が生じる。しかしそれは初期の作品の捉え方に戻るのではもちろんない。すなわちそこでは、物的被造物のみならず、霊的被造物の「質料性」が問題にされるようになる。そして、そこで特に問題となるのは言うまでもなく霊的被造物の「質料性」である。

確かに、「地」は物的被造物の「無形質料」と理解されるので、それが「無から造られた」ということの説明はつくが、霊的被造物のそうした性質は聖書的にどこで保証されるかという問題は残ったままである。『告白録』12巻では、「すべての可變的なものは、何か無形のものの存在を私たちに知らしめる」とあり、同時に「それ自身は可變的だが、不變の形相に密着しているために變動することのない存在」として霊的被造物が考えられているので、その「質料性」についても考えることは可能ではあるが、しかしその「質料性」についてははっきりとは言われていない。13巻になると、霊的被造物の「質料性」が必要とされる基本的な枠組みは既に出来上がっているといえるが、その問題としては固有に展開されていない。それが正面から問題にされるのはやはり『創世記注解』である。そこで次に『創世記注解』において、霊的被造物を中心にその「質料性」についてみるこ

にしよう。

## V 靈的被造物の「質料性」

『創世記注解』I 巻によれば『創世記』冒頭の「天地」はそれぞれ靈的被造物、物的被造物の「無形質料」を意味するものと理解される。

「あるいは天と地ということから、靈的、物的被造物両者の無形質料が語られているのであろうか。つまり、靈的生についていえば、すでに創造主に身を向けたのものとしてではなく—そのように身を向けることによって形づくられ、完成されるのであり、身を向けないならば無形のままである—それ自身のうちにおいてありうるようなものであり、物的なものについては、あらゆる物的性質を欠いたものが、なお物的なものとして理解されるとすれば、それがこのような場合である。<sup>(26)</sup>」今ここで靈的被造物の方に注目するならば、靈的被造物は、創造主に身を向ける (conversio) ことによって形づくられ (formatio)、もし身を向けないなら無形のままであるとされる。では、靈的被造物が身を向けること、また形づくられるとはどういうことか。

少し後のところで、『創世記』1 章 3 節の「光あれ」についての解釈がなされるところで、その「あれ」という神の呼び出しに応ずることが身を向けることであり、そのようにして形づくられることが言われる<sup>(27)</sup>。

こうして被造物は創造主によりすがることによって、つまり父に常に変わらずよりすがり結合して父と全く同一である形相に、各々の類にしたがって倣うことによって、被造物は形成され完成するのである。

靈的被造物は神の「あれ」という言葉に向かい、「あれ」という命令の言葉にあらわされる創造主と被造物の主従関係を、父と子の関係を模倣しながら受け入れることが形づくられることなのである。

ところで靈的被造物は神の呼びかけの言葉を認識し、それに応ずるという仕方で形づくられる以上、そのような言葉に従わない可能性をも有しているのであり、そのような要素をアウグスティヌスは無形性 (informitas) と呼んでいる<sup>(28)</sup>。

ここでの「無形性」は、「無に向かう」というマイナスの意味で用いられており、『未完の創世記注解』において用いられるニュートラルな意味合いとは明らかに異なっている。

この違いについては、恐らく、書かれた時期の違い、念頭に置かれている被造物の違いなどの側面からある程度説明をすることが可能であろう。

『創世記注解』において念頭に置かれているのは明らかに靈的被造物であって、『未完

の『創世記注解』において念頭の置かれている物体的被造物とは異なっている。もちろん両者ともに神によって造られた被造物ではある。しかし靈的被造物と物体的被造物とでは、その創造主に対する関係は同じではなく、むしろそのような差異にスポットをあてて展開したのがこの『創世記注解』であることを考慮するならば、こうした違いが生じてくるのは当然であると言えるかもしれない。

ところでこの『創世記注解』に見られる靈的被造物における「質料性」の問題は、その少し前に書かれた『告白録』とも若干相違していると思われる。例えば、その第12巻には次のような言明がある。「それらのもの（被造物）はあなたから、万物の形相であるあなたとの類似性を受けたのではなく、かえって反対に、無から形なき非類似性を受けた。しかし、この無形の非類似性は、諸々の事物が各々の類に従って定められたように受けた能力によって、一なるあなたのもとへ立ち返るとき、あなたとの類似性によって形づけられるであろう。<sup>(29)</sup>」ここでは靈的被造物と物体的被造物の両方に該当するような表現となっているが、非類似性そのものは、無から造られた被造物の在り方を規定するものとして特に批判的な響きは有していない。しかし『創世記注解』においては、多少今の文脈に直して言うならば、「被造物は創造主によりすがり、各々の類に従ってみ言葉に倣い、いわば類似することによって形づけられるのであって、もし従わないならば非類似のままに留まる」というように批判的に捉えられているのである。このようにしてみると、『創世記注解』においては、靈的被造物の「質料性」は否定的にのみ理解されていると言わなくてはならないのであろうか。

## おわりに

アウグスティヌスが被造物の「質料性」を形を受ける能力、力、可能性として捉えていることはこれまでの考察においてすでに明らかにされたことである。しかしながら、『創世記注解』の靈的被造物に注目する限り、「質料性」は「無形性」として、つまり「無に向かう」ものとしてそのマイナス面だけが強調されているように思われる。

これまでにみてきた被造物の「質料性」はここにおいて否定されてしまったのであろうか。例えば、『未完の創世記注解』においてその「質料性」として捉えられた「形を受けることへの従属性」「形を受けることで自らに立ち返っていくこと」と言った性質は否定されてしまったのであろうか。それとも物体的被造物と靈的被造物とは別々に考えられるべきなのか。しかしその場合、『創世記注解』において明確に示された靈的質料とは何を意味しているのであろうか。また、先に提起された被造物の有するある種の自由性とはど

のようにかかわるのであろうか。

『創世記注解』によれば、靈的被造物の「質料性」は、「無形性」として、つまり創造主の招きに応じず、そこから離反する可能性を有したものとして捉えられており、確かにそこには被造物のある種の選択の自由の余地は認められている<sup>(30)</sup>。しかし靈的被造物を積極的に捉えるならば、ここで重要なことは、それが神の招きに応じてみ言葉を真似て従うことによって形づくられ、向きを変えるというその独特の在り方である。そしてここには靈的被造物の自由なる、しかも自覚的な決断の場がある。そしてその際、以前には物體的被造物を念頭に置きながら捉えていた、「形を受ける可能性、力、能力」、また「形を受けることへの従属性」、さらにまた「形を受けることによって自らに立ち返るという性質」といった「質料性」のもとに捉えられた性質が、もう一度靈的被造物において生きてくると思われる。

つまりここでは、被造物は今述べられたように、神のみ言葉を聞き、認識してそれに応ずるというところに示される判断の自由性を有するものとして置かれている。しかし単にそれに留まるのみではなく、そのような仕方で、被造物が自らの真の在り方を知り、神の命令に従属することによって真の自己へ立ち返るというところにあらわれてくる自由性をも有しているのである。このことを通常の意味で「自由」と呼ぶかどうかはまた別の論議が必要とされるが、しかし、いわゆる被造物の自由性について語りうるとすれば、こうした被造物の捉え方を無視しては通れないようなひとつの在り方がここでは示されているのであり、この類の問題を考える際に、逆に何らかの示唆を提供してくれると思われる。

アウグスティヌスは、このような被造物の在り方に、長年にわたり、その「質料性」に深く思いを寄せる中で到達したと思われる。『創世記注解』において靈的被造物の「質料性」を前面に出して問題としたのもこのことと深くかかわっているであろう。

— 註 —

- (1) 例えば、マカバイ記 II, 7, 28. ただし新共同訳聖書では、「子よ、天と地に目を向け、そこにある万物を見て、神がこれらのものを既に在ったものから造られたのでないこと、そして人間も例外ではないことを知っておくれ」となっている。
- (2) 有賀鐵太郎「創造と贖い」（有賀鐵太郎著作集3『象徴的神学』所収、pp. 321-343）を参照のこと。ここでは旧約聖書からアタナシオスまでの「創造」理解が概観されている。
- (3) *De Genesi contra Manichaeos*, I, 2, 4. 尚、拙訳『マニ教徒を反駁する創世記注解』(1)（『柳城女子短期大学研究紀要』第16号、1995年所収）を参照のこと。
- (4) 例えば、*ibid.* I, 6, 10 を参照。
- (5) *De fide et symbolo*, 2, 2.
- (6) 新共同訳聖書では、「形のない素材から宇宙を造られた全能の手は」となっている。

- (7) *De fide et symbolo*, 2, 2.
- (8) A. M. la Bonnardière, *Biblia Augustiniana*, A. T. *Le Livre de la Sagesse*, Paris, p.295, pp.87-90.
- (9) *Confessiones*, XII, 6, 6.
- (10) *ibid.*
- (11) 一般にマニ教に属していたアウグスティヌスの考えとマニ教そのものとをイコールで結ぶことには慎重さが必要であるが、この問題に関する限りは、テキスト的に見て可能であると判断した。
- (12) 例えば『マニ教徒を反駁する創世記注解』『未完の創世記注解』。
- (13) 形相、形を受ける可能性をformabilis、またはfabricabilisという。可造性とでも訳しえようか。尚、拙論「『未完の創世記注解』における「創造」についての一考察－『マニ教徒を反駁する創世記注解』との比較において－」（『中世哲学研究』XIV, pp. 96-104, 1995, 京大中世哲学研究会）を参照のこと。
- (14) *De Genesi contra Manichaeos*, I, 5, 8.
- (15) *ibid.*, I, 7, 12.
- (16) *De fide et symbolo*, 2, 2.
- (17) *De Genesi ad litteram, liber imperfectus*, 3, 10.
- (18) *Confessiones*, XII, 3, 3 ; XII, 8, 8.
- (19) *De Genesi ad litteram*, I, 14, 28.
- (20) *ibid.*, V, 17, 35.
- (21) *Contra adversarium legis et prophetarum*, I, 8, 11.
- (22) *De vera religione*, 18, 36.
- (23) *Confessiones*, XII, 19, 28.
- (24) *De Genesi ad litteram, liber imperfectus*, 4, 15.
- (25) *ibid.*, 4, 14. 尚、註（13）にあげた拙論も参照のこと。
- (26) *De Genesi ad litteram*, I, 1, 2.
- (27) *ibid.*, I, 4, 9.
- (28) *ibid.*, I, 4, 10.
- (29) *Confessiones*, XII, 28, 38.
- (30) 片柳栄一「創造における *Conversio* －アウグスティヌスの『創世記逐語注解』における霊的被造物の生成－」（『中世思想研究』第25号、1983年、中世哲学会編）を参照のこと。ここで片柳は、霊的被造物の無形性のうちに被造物の「自由」を考えている。その把握は、それ自体間違いではないが、それからのみ「自由」を考えると、被造物の捉え方がやや消極的になりすぎるように筆者には思われる。